

⑦慈善基金「ゼムリャキ」メンバー（原発事故被災者）との意見交換（テーブルA）
（10月7日（金））

出席者

小平団長

松野頼久理事（民主）

山井和則理事（民主）

遠藤乙彦理事（公明）

河井克行委員（自民）

タマラ・クラツシカ慈善基金「ゼムリャキ」代表（元プリピャチ市内文化施設政治・大規模行事課長）

ルドゥミラ・ディアトローヴァ元内務省プリピャチ支部会計担当職員（現在、年金生活者）

ガリナ・ドンドウコヴァ元プリピャチ市幼稚園長（現在、年金生活者）

スヴェトラナ・ベスパローヴァ元プリピャチ市内小児病院医師（現在、キエフ市内小児診療所チェルノブイリ部長）

ヴィクトル・ペトロフ元チェルノブイリ原子力発電所職員（物理学者）（現在、画家）

アンナ・マニ元プリピャチ市民（事故当時プリピャチ第2中学校在籍）

【写真】慈善基金「ゼムリャキ」との意見交換



○小平団長

(出席議員の紹介の後) 本日は、我々調査団のために貴重な時間を割いていただきましてありがとうございます。

昨日、チェルノブイリに視察に行つてまいりました。貴重な視察でありました。

ご承知のとおり、我が国では、本年3月に、福島原発がチェルノブイリ原子力事故と同じ国際原子力事象評価尺度のINESレベル7、そういう暫定評価も下される最悪の原発事故を起こしてしまいました。

そこで、私ども国会としては、議事に事故調査委員会を設置する法律を9月30日に作りました。政府には既に事故調査委員会がありますけれども、政府とは別に、議会としてもこの事故原因の究明そして対策に頑張っていきたいと思つて、作りました。

今日は、実際に原発事故に被災された方々あるいはその被災者を支援してこられた皆さんから直接いろいろな御意見を聞くことができれば大変貴重なものになり、今後の参考にしたい、こんな意味で御意見をいただきたいと思つております。

「ゼムリヤキ」におかれましては、さまざまな被災者支援を行つてきた中で、特に、チェルノブイリ事故で被災をした児童の次の世代の子供たちも先天的障害がある場合も多いということで、次の世代に対する健康支援活動も行つておられると聞いております。

我が国でも、福島原発周辺の被災児童の将来にどう影響があるかということが大きな関心事でありまして、被災地の中には、将来きちんと元気な子供が産めるのかどうか心配している、そんな旨の悲痛な内容の作文を書いた女の子もいるほどです。

今の世代に対する支援はもちろんですけれども、将来の世代の子供たちにとつても必要な手を打つことが我々に課せられた大きな責任である、こう考へております。

放射能の将来的な因果関係、影響というのはまだ不透明でありますけれども、しかし、手遅れにならないように、また将来後悔することがないように、原発事故の被災者のために今何をなすべきか、この機会に皆さんから貴重な御意見をいただければと思ひます。

どうぞよろしくお願ひします。

○クラシツカ・「ゼムリヤキ」代表

本日、ここへお呼び頂き、ありがとうございます。私たちの団体にとって非常に光栄でございます。

私たちは、3月11日の地震後の状況を見まして、まさに自分たちが経験した被害のようなものを目の当たりにし、自分たちのことのように感じました。

チェルノブイリの事故がありました後、すぐに手を差し伸べてくれたのは日本人でございます。広島、長崎の被爆者の人たちが自分たちの経験を述べてくださいました。

今、立場が変わりまして、日本からいろいろな方々が、私たちの経験を聞きたいと申されますので、私たちは、知っている限りのことをすべて皆様方にお教へえいたしましょう。

今ここにおります出席者をちょっと紹介いたします。

ここにおりますのが、アンナ・マニと申しまして、プリピャチ市で、事故のとき

15才でした。次に、スヴェトラナ・ベスパローヴァで、プリピャチ市で小児科医をしておりました。彼女は現在も小児科医でチェルノブイリ部のある病院で働いています。次に、ドンドウコヴァですが、プリピャチ市で幼稚園長をしておりましたし、ここ、キエフでも幼稚園の園長をしております。ディアトローヴァですが、プリピャチで主任会計士として働いており、今も会計の仕事をしております。ヴィクトル・ペトロフは、物理関係の職員として発電所に勤めておりました。彼は今、年金生活になり、現在では絵を描いております。今、私たちの団体では、彼の絵の展示会もしており、彼はチェルノブイリの事故に関して国に意見を表明しております。

1987年からできております、この「ゼムリャキ」は様々な支援活動を行ってきました。

○小平団長

最初に日本語で話しかけられましたが、日本語は、どこかで習得されたのですか。

○クラシツカ・「ゼムリャキ」代表

日本人のイナバさんという方がおられて、年に二回、キエフ訪問を兼ねて、日本語を教えてくださいたりしています。彼女はボランティアで、無料で教えてくれています。4年にわたる彼女との友好のおかげで、私たちは日本語が少しですけれども話すことができます。

○河井議員

私は出身が広島で、放射線のちりを含んだ黒い雨が大量に降った地区が私のふるさとです。

今回の出張で一番心待ちにしていたのが、皆さんとの意見交換です。

どうしてもお聞きしたいことが三点あります。

一つは、二〇〇五年の国連科学委員会で、甲状腺がんが6000人、死亡が15人という報告が公式にはなされていますけれども、実際そのときその現場にいらっしやっただけの皆さんの現場の感覚で、この報告の妥当性についてどう解釈しておられるか。

二つ目は、広島もそうだしこちらもそうだと思いますが、被曝した後、特有の倦怠感、だるさとか、今まではぶらぶら病と言っておりましたが、被爆直後の倦怠感、は皆さんになかったのでしょうか。

最後の質問は、被曝による心理的な影響はかなり大きいとの話が広島でもどこでも証言されていますが、チェルノブイリの事故を経験したとの心理的な影響がどうか、差し支えない範囲で教えていただきたいと思っております。

○ベスパローヴァ元プリピャチ市内小児病院医師

私は医者ですが、第一番目の質問につきましては、この事故があった当初、急性の放射性障害が起きました。めまい、頭痛、出血等いろいろな障害があり、そのような人たちは病院に運ばれて、長い治療を受けました。

ほかの人たちは、例えば、頭痛を訴えたり、子供が避難した際に、のどの痛み、咳込みなどの症状を訴えました。それが、最初の事故の2週間のことでした。

数字に関して言えば、私たちキエフ市だけでも、チェルノブイリの被災者が生まれた子供も含めて、13000人も登録されています。あくまで数字に関しては、6000人というのは違う数字だと考えます。2005年の段階では、もっと多くの方が亡くなっているのではないのでしょうか。というのも、処理班の人々が多く含まれているわけで、放射線障害、脳血栓、脳溢血、脳卒中等の病気が出ております。2005年になればもう腫瘍の病気も始まっているでしょうし、精神的な病気も出てきているでしょう。それはその事故の影響によるものかもしれません。

私は小児科医として診ており、当初、病院に運ばれてきた子供で、急に死んでしまうということはありませんでした。ほかのウクライナの都市と同様に、生まれながらに何か問題がある子供、あるいは何かの異常で亡くなる子供、そういうものはありませんでしたが、放射線の影響というのは当初はありませんでした。私たちが避難した地区で、25年間診まして、チェルノブイリの子供たちの中で、放射線で死んだ人はおりません。その子供たちはもう大人になっておりますが、例えば事故死とかいうことはあるでしょうが、放射線の影響で死んだ者はおりません。しかし、その者たちから生まれた子供の中に、心臓の隔壁の障害とか、脳に障害がある子供が生まれたということがあります。特に、事故処理にかかわった人の子供たちです。もっとも、それは頻繁に起こることではなく、割合としては少ないケースであると思っております。

子供たちの中には、当初、精神的なストレスによる色々な障害がありました。最初の段階では、お父さんやお母さんから離されて子供キャンプへ送られたことにより、小さい子供たちはイライラしたり、不眠や食欲不振になりました。それらは精神的なことが原因でした。その後、5年くらい経って、子供たちの中に、甲状腺がんが見られるようになりました。それは1997年ぐらいに、大きな高まりを見せました。また、骨のがんや、胆のうのがんも見つかりました。

その後、被害者が大人になり、病気になる割合も増えていっています。

○河井議員

プリピャチにいた子供たちについては全員、その後25年間、健康調査を行い、被曝線量を測り続けているのでしょうか。

○クラシツカ・「ゼムリヤキ」代表

1991年に法律が制定されまして、社会保障、医療保障の法律ですが、チェルノブイリの被害者全員に年に一度の定期検査を義務づけております。

しかしながら、検査の機材が不足するなど、なかなか実行はされませんでした。

世界各国からの支援、その中には、日本の支援もございます。例えば、日本から、お医者さんが来てくださいます、無料で診察してくれるサービスもございました。公立の病院で検査する場合は最低限の検査しかしてくれませんので、日本から来ていただいたお医者さんがよく診てくださいます。多くの私立のクリニックはできませんけれども、多くの人々にとっては、なかなかそこへ行くことはできません。

○ドンドウコヴァ元プリピャチ市幼稚園長

先ほど言われました国連の機関の数字についてですが、その数字は、非常に引き

下げられた数字ではないか。実際の二分の一、三分の一かもしれません。そのような数字は、なかなか分かりません。しかし、私たちの目の前で起きたことですので、避難した人たちは、現在、どれぐらいの人が残っているかを知っています。その間に、幾つかのお葬式があったことをよく知っています。特に男性の方、処理に当たった人たちの若い死がよくありますので、そのようなお葬式、あるいは残された未亡人たちの数をやはり感じます。もちろん、正確な数字というのは言えませんが。

私の息子は14才でしたけれども、今、39才になりました。外見はがっしりした元気そうな男でございますが、いわゆる年齢的な遅れは非常に感じます。それは、私たちの子供たちの特に性格、特徴の一つであります。年齢的な遅れと言うと、ちよっと違うかもしれませんが、疲労感です。39才のがっしりした男ですが、すぐ疲れてしまう。だから、普通の生活というか、普通の職場になかなか就職できません。就職して仕事のノルマを達成する前に、疲れてしまうのです。

○マニ元プリピャチ市民（事故当時プリピャチ第2中学校在籍）

私がプリピャチから避難したときは、十五才でした。その事故前は非常に元気でスポーツウーマンでした。私は、事故の後、透析を受けております。その病気は事故と関係があると認められており、障害者の認定も受けています。

○河井議員

さきほどの倦怠感、広島市の被爆者たちもずっと長く、40年間、50年間も差別されてきた原因の一つです。つまり、単に怠けている、仕事をしたくないだけだと周りから見えますが、実際、本人は本当に仕事をしたいのに動くことができない、これは明らかな放射線障害であると広島大学の先生たちはみんな言っています。

○ディアトローヴァ元内務省プリピャチ支部会計担当職員

私は、ある時期、自分の主人が怠け者だと思っていたことがあります。主人は、事故の後、7年間にわたりまして事故処理に当たっておりました。2週間、現地で仕事をし、2週間、キエフで生活する、そのような生活をずっと続けておりました。2週間、キエフにいるときは家事を手伝ってほしいと思っていたのですが、その2週間の間、ずっと動こうとしないのです。私は、怠け者のだんなと思っていた。当時、私はそう思っていたのですが、主人は「自分は本当に疲れているのだ、本当につらいのだ」と言っておりました。当時、40才です。その後、7年間、事故処理に当たり、62才で亡くなりました。40才までは非常に健康な人間でありまして、病気一つしませんでした。夫の両親は非常に長寿でございまして、「オレも長生きするぞ」といつも言っておりました。ところが、糖尿病等の非常にたくさんの病気にかかりました。

○松野議員

皆さんは、避難区域の中に当時はお住まいになられていたわけですが、事故の後、事故があった事実を知らされたのはいつごろでしたか。

○クラシツカ・「ゼムリヤキ」代表

1986年4月26日の未明に事故があり、27日には全員が知ることにりましたが、26日の朝に、一部、その情報を知っている人もいたでしょう。

27日の朝10時には、避難が始まるのがラジオで知らされたので、その被害の状態、どれだけの深刻さかは分かりました。私たちは、3日間だけの避難ということで、必要なものだけを持って避難するようと言われました。パニックはありませんでしたが、情報は全然ありませんでした。

○ペトロフ元チェルノブイリ原子力発電所職員

私がちょっと、補足いたしましょう。

爆発当時、私は自分の自宅におりまして、窓越しにその爆発音を聞きました。プリピャチ市の自宅は、破壊された原子炉から3キロメートルの距離でした。非常に暖かい日でしたので、窓は開けっ放しで、その音が聞こえました。

私には子供が2人いまして、女の子は6才、男の子は14才でした。14才の息子は朝になって、自転車で見に行きました。おそらく1キロぐらい近くまで自転車で行ったことでしょう。プリピャチの町の外れからは、破壊されている原子炉が見えたわけです。

この二人の子供、娘と息子は、成長しましたがけれども、健康状態はあまりよくありません。やはり頭痛、疲れ、そのようなものを感じております。

当時、私は2週間交代で、事故後6年間、処理班として活動しました。私は発電所で、いろいろな機器から得られたデータを記録する係でした。

私は自分の健康に気をつけているつもりであり、松の木の生えている、自然のあるところへ引っ越しましたし、体操をしたり、ジョギングをしたり、冷たい水を浴びたりして健康を保つようにしています。

それから、絵も描いております。よろしかったらどうぞ、私のパンフレットです、いろいろな絵が描いてあります。これは名刺ですが、私の絵の一部が使われております。皆さんは、チェルノブイリ博物館に行かれたそうですが、そこのホールには私の絵もあります。

このチェルノブイリの事故は、人類が起こしてしまった最悪の、絶望的な事故です。日本は高度な技術を有していますが、原発事故に対しての防止の保証がやはりなかったわけです。原発事故を防ぐ保証は不可能でしょうし、このような原発の事故があると人類あるいは地球全体を保つことはできないでしょう。私はその絵の中で、その状態を表現しました。絵の中に砂時計がありますが、上には地球がありまして、それが崩れていくことを表現しています。下には、人間が考えた、その中で生きなければいけない人工の生活環境があります。その上と下の間の細いパイプ部分が、そこに人間が立って、そのすべては人間の体を通していくという象徴です。

○小平団長

今、皆さんの体験を聞かせて頂くと、私は皆さんは原発については当然反対ということになると思っております。つまり、日本でしたら、皆さんのような経験をされた方は間違いなく、もう原発は要らないとの運動を展開します。

ところが、今日、先ほど朝、リトヴァン最高会議議長にお会いしましたが、国はエネルギーの50%を原発に頼っており、原発推進の考え方が国民のマジョリティ

一との説明を受けました。皆さん方も、同じ意見なのでしょう。

○ドンドウコヴァ元プリピャチ市幼稚園長

私たち被災者の中でも、意見が違いますが、私とか、こちらの者は、原発あるいは原子力発電の技術に対しては反対ではありません。それは、エネルギー源を交換することは、今はできないわけですから。

問題は、安全にそれを運転することです。それは、学者たちがこれからも研究を重ねて、原子力を利用したエネルギーの生産、発展を推進していかなければなりません。

もちろん、私たちあるいは福島の人たちも被害を受けました。この中にもいますし、そして世界の中にも、原子力発電に反対する人たちがいます。それに対して、私たちは理解をしていると思います。

○ペトロフ元チェルノブイリ原子力発電所職員

科学の発展、技術の発展を人為的にストップすることはできません。もし原子力をストップすれば、今度は核融合技術になるのでしょうか。もしかしたら、真空を利用したエネルギーがあるかもしれません。私は専門が物理学ですので、何かそのように感じます。

ところが、そのような新エネルギーは事故を起こすと、今の事故のレベルでは済まないぐらいの大きなものになります。それは、全地球が危機に瀕するようなものです。

ですから、この辺で、地球の生命を守るための何がしかのパラダイムを考えなければなりません。東洋の哲学、中国、日本、インド等の哲学の中にその答えがあるかもしれません。

○クラシツカ・「ゼムリャキ」代表

世界の中で、原子力発電をストップしようとする脱原発の国、例えばオーストリアがあります。多くの水力発電や火力発電をつくるとの考え方を取り、また、トルコでは太陽光発電、ドイツでは風力発電が頻繁に行われています。

エネルギーを生み出すには色々な形態があるが、国がどういうものを採って、どのようにするかは、まだまだ難しい問題があると思います。

それぞれの政府は、国民たちがいかなるリスクを持っているのか、つまり何か起きたときに、その結果、どのようなことが起きるのかを考えなければならない。そのようなリスクと、人々の健康あるいは生活を秤にかけて考えなければいけない。

○ディアトローヴァ元内務省プリピャチ支部会計担当職員

私は普通の会計士であります。ですから、私は女として、妻として、母親として、もし、このような話の中で、原子力発電は非常に安いものだとの話を聞くと、国にとって国民の命が安いとなれば、原子力発電は安いことになるでしょう。

左におります彼女（マニ）が十五歳のときに被曝して、この若い年で障害者になり、また私の夫は早期に亡くなり、これが安いと言うのであれば、原子力発電は安いものなのでしょう。

例えば、大都市にネオンサインがきらきら光る、そのために子供たちが病気になったり主人を亡くしたりする、それをもって、国のエネルギー政策だからというのならば、これは、あまりに不公平であると私は感じます。それぞれに、それぞれの意見はあるわけです。

○クラシツカ・「ゼムリヤキ」代表

河井さんの三つ目の質問、心理的な可能性についてちょっと付け足します。

フラフラ病、あるいは疲れは、一つは体の免疫低下もあるのでしょうか。免疫が低下することで風邪を引いたりしますが、それでだんだん病気が重なっていくことになります。

事故後ですが、やはり精神的なショックもあります。そして、それらが重なって、人々にやはり影響を与えていると思います。

人々の中には、自分たちの生活を一瞬にして変えさせられた、あるいは自分たちの生活基盤から無理やり引き抜かれて、どこかへ植えかえられた、そのような人たちには、やはり精神的なショックは大きいでしょう。

皆さんのところも、地震、津波の被害でたくさんの方が亡くなった精神的なショックと、放射能の被害による精神的なショックの二重のショックを受けている人がおられると思います。

ですから、皆様には、彼らにとって必要な条件整備をすることが大事で、彼らがケアを受けていると思えるような状況にしなければならないと思います。もちろん、死んだ方々のことも哀悼を申し上げますが、生き残った人たちへのケアもやはり考えてください。

○遠藤議員

今、ケアの問題をお話されましたが、具体的にどのようなケアがすぐに必要なのか。同じような立場に置かれて、多分、移住せざるを得ない人たちが出てくると思いますが。

○クラシツカ・「ゼムリヤキ」代表

まず、体育館など、プライバシーのないところを使用されているのをテレビで見ましたが、そのようなことがないようにしなければなりません。

確かに、すぐに住宅を建設することはできないかもしれませんが、その人たちが外へ放り出されたとの意識を持たないために、やはりちゃんとした住宅の方がよいのではないのでしょうか。

二つ目は、やはり医療面の補償です。

もうそろそろ、医療面での問題が発生するはずですので、その処置をする、あるいは検査体制をもっと拡充しなければいけないでしょう。

1987年にこの団体ができまして、そのときには、たくさんの方々、避難民の人たちは非常なストレスを持っておりました。

この人たちにとって必要なのは、最初のときには、お互いに自分たちのことを話し合える場、話し合えるところであり、コミュニケーションが必要でした。それは、老人であったり中年であったり、あるいは子供であっても、各年齢層に合わせて、

何かコミュニケーションができる場がとても助かります。年齢層が違っても、一つのコミュニティの中で話をする中で、新たな興味がわいてくることもあります。

○ディアトローヴァ元内務省プリピャチ支部会計担当職員

福島のことに関して、私は非常に注目しております。

私にとって非常につらかったのは、政府が私たち国民に対して、見守ってくれる、感じとってくれることがなかったことです。そのように、皆さんが被災者に対して、見守って、常にコンタクトを持っていること、それをアピールしてください。

86年当時、私たちの政府は情報を全く公開いたしませんでした。一体何があるのか、どうなるのか、全然わかりませんでした。

その後で、住宅をいただけるとの話がありました。その情報が全くなく、避難してきてどうなるかわからない状態で、私の両親が私を見て、ちょっと精神的におかしくなったのではないかと思うぐらいでした。

その後、国から新しい住宅をいただけるとの話を聞いて落ちついたわけであり、その順番が回ってくるまで待とうではないかとの気持ちになりました。それまで、そのような情報が全くないことで、人々は非常に混乱しました。

○ドンドウコヴァ元プリピャチ市幼稚園長

キエフに移住して、新しい家を、部屋をもらいましたが、やはりノスタルジーというか、プリピャチの方がよかったとの気持ちは強くあります。そのため、今のキエフの生活が嫌になって、キエフを憎むようになりました。昔は、キエフに行くのはとても楽しみでしたが。ですから、汚染された地域にも人々が戻っていることになるわけです。

このように、私たちの中にも、もとへ戻りたいとの気持ちの人たちがたくさんいるのです。その戻りたいとの強い気持ち、でも、それができないことによるストレスの感情、それをやはり酌み取ってあげて欲しいと思います。

それと、お金ですね。いわゆる生活を安定させるために、事故後の補償により、生活の基盤が得られたことで、やはりそれで安心もできる。やはり、何かケアをされているとの気持ちがあります。そのようなケアのもとで、新しい場所で生活していこうとの気持ちになっていきます。

最初は3日間で戻るつもりでしたが、もう25年間ここに住んでいます。

私も処理活動に当たりました。幼稚園の園長に何ができるのかと思いましたが、招聘という言い方でしたが、実際は呼びつけられ、宿泊施設等の当番係をすることになりました。もちろん原子炉のところで仕事をしたわけではありませんが、当直員の宿舎、そのような当番もしましたので、それなりにやはり疲れもありました。

その間、治療をし、障害者の認定も受けています。

○遠藤議員

一つ、質問いたします。今のふるさとを失った気持ち、またキエフが嫌いになった気持ち、私も理解できますが、逆にキエフが第二のふるさととして好きになるためには、どんな条件、どんな環境があればよいと思いますか。

○ドンドウコヴァ元プリピャチ市幼稚園長

難しい質問です。

○遠藤議員

きのうプリピャチにも行きましたが、木がたくさん生えております。森の中の町、廃墟という感じでした。

○ディアトローヴァ元内務省プリピャチ支部会計担当職員

自然の豊かな場所ですから、川もあります、魚も多いです。

○クラシツカ・「ゼムリャキ」代表

当時、私たちも若かったですが、向こうでは自分たちの好きなことをやっていける生活であり、非常に満足いく生活でした。

キエフは大都会で、非常に騒がしい町です。この25年間のうちに慣れて、子供を育てております。

政府は、その人たちが満足いく生活状況を整えなければいけません。もう一度言いますが、住居、住宅の中には、ベッドであり、タンスであり、その人たちが生活に困らないものを与えなければならないでしょう。当然のことですが、今まで自分の家にあったものがゼロになったときに、それでうつ病になったときに、そこから始めろと言われれば、やはりそのようなものが必要でしょう。

○松野議員

今、日本の福島では、日本政府は、例えば何キロ圏を長い間立入禁止区域にすることをまだ決めていません。それにより、多くのその地域の住民、避難している人たちが、自分たちはいつ戻れるかわからない状態であります。

皆さんが、もう自分の町に戻れない、長期間にわたって戻れないことを知ったのは、事故があつて大体どれぐらいのときでしたか。

○クラシツカ・「ゼムリャキ」代表

私たちは、避難の過程で、30キロあるいは40キロあたりの村に行きまして、そこで住めるところで住む、村まで行って仮住まいすることになりました。それで、行き先のない人は、その村々へ十日、二週間と残りました。あとは、両親がどこかに住んでいる人は、そこへ行くことになりました。

そして、その村にどれぐらいの長期間にわたり住むのかとの情報は、全然ありませんでした。3日間だけと聞いていましたので、ペットも置いたまま、えさ、水を少しだけ置いて避難したわけです。正しい情報が、ありませんでした。

病気がちの高齢の両親を置いていったとの話も聞きました。3日したら帰ってくるのだからと言われたので、全くの寝たきりの人は別としても、3日ぐらいだったら大丈夫とか、両親が病気持ちなので、3日だったらここにいた方がいいと判断したので、そのようなケースもありました。

○山井議員

チェルノブイリ博物館で、キエフに避難した人よりも、昔の村に戻った人の方が老人は寿命が長いとの話を聞きましたが、昔の村に帰ることにしてはどう思われますか。

○クラシツカ・「ゼムリヤキ」代表

自分の家の壁、自分の家が人を治療するとの言葉もよく言われます。

そのお年寄りたちは、何代にもわたってその土地、家に住んでいて、彼らが避難した先の生活条件とは全く違うわけであります。そのような人たちですから、避難先に一カ月、二カ月と住んで、やはり自分の家へ帰りたいため、いろいろな交通手段、あるいは歩いてでも自分の村に帰って行きました。彼らは精神的な満足により、長生きができたのでしょう。

高齢の人をほかのところへ移住させることは、老木を植えかえる、植樹し直すようなものであります。

○遠藤議員

今回、避難したときに高齢者の人たちを調査したところ、血圧が高く、170以上の人がほとんどでしたが、二人に一人、血管の中に血栓ができていたとのことです。これは、典型的なストレスの効果だと見られています。

○山井議員

それで、日本でも今後、高齢者が地元に戻ることを許可するのか、高齢者も不許可とするのかが大きな政治判断ですが、そこはどちらがいいと思われませんか。

○クラシツカ・「ゼムリヤキ」代表

それは、心から帰村を望んでいるのかどうかによります。

移住した人たちのうち、老人はたくさん死にました。

しかし、それをする前に、そこにはどれぐらいの放射線量があって、どのような可能性があるのかを必ず説明することが必要です。皆さんのところもそうかもしれませんが、政府はそのような事実関係を隠すところがあります。もしもそのような隠しごとがなければ、私たちはもっと自分たちの身を自分たちで守ることができたでしょう。

キエフへ放射線の含まれた空気が流れ込んだときにも、キエフではメーデーの行進が行われました。事故があっても、私たちの子供は砂場で遊んでいました。幼稚園の砂場で遊んでいた私たちの子供たちは、その後、非常に病気がちになり、大人まで生き残れないのではないかとよく先生方と話をしましたが、今は何とか大人にはなっておりますが、病気がちです。もしも正確な情報があったならば、私たちは、子供を砂場で遊ばせることはしなかったはずで。

ですから、議会、国会あるいは政府の皆さんは、私たちが犯した失敗を繰り返さないようにしてください。それは、健康を失うことになるからです。

○ディアトローヴァ元内務省プリピャチ支部会計担当職員

私は発電所関係者ではないので、情報の大切さについてはよく知りませんでした。

私は子供が心配ですので、発電所で働いている知り合いに電話をしました。そのとき、町は五レントゲンの高い放射線量であるとのことでした。そのときに言われたのは、子供を外へ出してはいけない、家の中を濡れたぞうきんでふき取りなさいと。私はそのような簡単な情報が、自分たちの子供の命を少しでも助けたのではないかと思っています。

○ペスパローヴァ元プリピャチ市内小児病院医師

ネガティブなこと、悪いことばかりがいろいろとされていますが、一つ組織的にきちんと行われたことについて言っておきます。

土曜日、その日、私の子供は一年生ですが、ヨード剤を配られました。ヨード剤は甲状腺を保護するものであり、学校で組織的に配られました。家庭にもヨード剤の配付が行われ、大人にも子供にもヨード剤の配付が行われました。

発電所で業務に当たる人たちにも、一カ月の間、ヨード剤の配付が行われていました。

避難に関しては、普通の主婦として、女として見ると、それなりに組織的に避難が行われていたと思います。次の日の午後には、それぞれのアパートの入り口にバスが横づけになって避難しました。それは、きちんと住民台帳リストを元に行われ、それぞれの避難先の村でも、そのリストによって管理がなされました。色々ばらばらな村の人々が集められていましたが、私が行った村では非常に組織的に迎え入れてくれました。

それぞれの新しい住宅を手に入れて、91年に先ほど申しましたように法律も制定されました。その中には、だれが被害者か、汚染地のいろいろなランク、被災者の中のランクづけ、どういうものが被災者か等々が規定されています。その被害にあわせた補償があり、その中には、毎年、医療面の検査を受けることが義務づけられています。無料の治療、無料の健康回復がうたわれています。法律はできたが、それをいかに実行するか、そこに問題があると思います。

それと、私たちは家族単位で避難をする、まとまった形で、建屋ごとに避難する、コミュニティーごとの避難が組織的に行われました。

○河井議員

マニさんは15歳で被曝されて、20年以上にわたり、周りの同級生も含めて、主に健康面で様々なつらいことがあったと思いますが、どのようなことがありましたか、教えていただける範囲内で結構です。

○マニ元プリピャチ市民（事故当時プリピャチ第2中学校在籍）

私と同年齢の者たちは、避難した同じ地区に住んでいますので、よく会いますが、さすがに私のような病状の者はいません。それでも、血管の病気で慢性的に疲れが出たり、甲状腺の何がしかの障害を持っている人たちがいて、健康体の人たちは少ないです。

○ディアトローヴァ元内務省プリピャチ支部会計担当職員

私が非常に不愉快に感じるのは、このような若い女性が障害者となった原因は、

国中に電力を供給することを満足させるために、病気になる人が出たことです。

彼女（マニ）は今、治療を受けておりますが、自分の非常に少ない年金の中から、自分のお金で治療費を支払っていて、非常に不公平です。法律の文言はとてすばらしいものですが、私たちが受け取っている年金は非常に少ないです。

○山井議員

失礼かもしれませんが、マニさんは、どのような治療を受けていますか。

○マニ元プリピャチ市民（事故当時プリピャチ第2中学校在籍）

私は週に3回、それぞれ5時間ずつの人工透析を受けています。

○山井議員

それはやはり放射能と因果関係は、やはりあるのですか。

○マニ元プリピャチ市民（事故当時プリピャチ第2中学校在籍）

はい、公式的に因果関係が認められています。

これについては医療委員会があり、そこで、病気がチェルノブイリの事故と関連するかどうか認定されます。

○松野議員

そこで認定されても、やはり治療費は自分で支払わなければいけないのですか。

○マニ元プリピャチ市民（事故当時プリピャチ第2中学校在籍）

私は、人工透析の関係器具を買わないといけません。用材、手袋、脱脂綿、注射針、そういうものを週に3回、自分で買って持っていかなければなりません。それを自分の少ない障害者年金の中から出しているわけで、障害者年金の半分はそのために支出されます。

○小平団長

お聞きしますが、当時はソ連政府で、その後、貴国は二十年前に独立されましたが、当時のソ連政府の責任は、きちんと継承されているのでしょうか。そのような政府の責任について、何か、不安、問題があればお聞かせください。

○ペトロフ元チェルノブイリ原子力発電所職員

政府の責任については、ソ連時代の方が、きちんと見てくれました。社会的問題に関しても、不公平なところはありませんでしたが、それなりに見ていただきました。今のように、収入によって扱いが変わるとか、そのようなことはありませんでした。

現在は収入による格差がたくさんあり、国をコントロールしている人たちが財閥を形成しており、政府が私たちに対して注意を払うことは非常に少なくなっていると思います。

○ディアトローヴァ元内務省プリピャチ支部会計担当職員

ウクライナは独立してから、経済的にソ連時代のような勢いがなくなったことも大きいです。

○クラシツカ・「ゼムリヤキ」代表

事故が起きた直後、アメリカの医者であるゲイルさんが来ました。その人は、医師であるとともに、放射能の専門家でもあったのですが、チェルノブイリの被災者たちの生存年数は、あと十年くらいだと言いました。これを基に1991年の法律は、十年間ぐらい生き残る人がいるだろうとの前提で作られました。

このようなこともあり、政治家は私たちの社会保障の特典を撤廃しようとしています。そのため、私たちには社会保障を守るための政府との闘いがあります。私たちは法律を求めているのではなく、私たちの社会保障経費の保証を、生存権を求めています。治療をするためには、たくさんの支出が必要となりますので、そのため、政府との対話を行っています。

○ペトロフ元チェルノブイリ原子力発電所職員

まさに今、その妥協点を探しているところです。

○ディアトローヴァ元内務省プリピャチ支部会計担当職員

政府は経済的な問題であり、予算不足をすぐに言い出します。

事故の当時は人海戦術で、必要の有無にかかわらず大量の人員を導入し、人の命など考えていませんでした。若い兵士たちは、有無を言わず無理やり連れて行かれたわけです。日本では、必要な人数は、志願された方々で作業されており、私たちの国のように強制的に動員されることはないことと思います。私たちの国では、大量の人員の投入が理由で、チェルノブイリの被害者は膨大な数になりました。

○ドンドゥコヴァ元プリピャチ市幼稚園長

社会保障の特典を得ようとするために、本当はいなかったのにチェルノブイリにいたことにして、証明を無理にとろうとする人たちもいます。政治家の中にも、本当はチェルノブイリの被災者ではないのに、被災者証明、障害者証明を持っている人もいます。

○河井議員

さきほど、アメリカの医師が、余命十年と言ったとの話を聞きましたが、広島私の地元の被爆者は65年たっても元気で生きていますから、健康管理さえしっかりしていけば、皆さん絶対に長生きできると思います。

私が言うのも変ですが、やはり選挙を通じて皆さんの願いなり、気持ちを政治家に届けることが大事だと思います。私も地元に戻ったらいつもそのような関係の方々からいろいろな話を聞き、しっかり頑張らなければいけないと思っています。

○小平団長

皆様、私どものために、長い時間、大変お忙しい中を、ありがとうございました。我が国にとって福島は初めての原発事故ですが、皆さんはもうそれを前もって経

験されました。皆さんの貴重な体験、御意見も大切であり、我々は、それらを参考にして、この後、頑張っていきます。これからも、いろいろな不断の御示唆、御意見等をよろしくお願いいたします。

どうもありがとうございました。

⑦慈善基金「ゼムリャキ」メンバー（原発事故被災者）との意見交換（テーブルB）
（10月7日（金））

出席者

笠浩史理事（民主）
田名部匡代理事（民主）
太田和美委員（民主）
吉井英勝委員（共産）
照屋寛徳委員（社民）

パデノク元チェルノブイリ原子力発電所職員（元原子炉稼働部上級技師）（現在、年金生活者）
スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員
グラボフスキー元チェルノブイリ原子力発電所化学部技術オペレーター（現在、年金生活者）
稲葉ひろ子慈善基金「ゼムリャキ」日本語及び英語ボランティア教師

【写真】慈善基金「ゼムリャキ」との意見交換



○笠議員

（出席議員の紹介の後）本日は、本当にお忙しい中、皆様方へのお呼びかけに対しまして時間をつくっていただき、心より感謝を申し上げます。皆さんとの率直な意見交換をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店上級販売員

私は今、55歳です。事故当時は30歳でした。避難した4月27日は、息子の6歳の誕生日でした。その当時、ピリピャチに住んでおり、夫は原発で働いていました。

○グラボフスキー元チェルノブイリ原子力発電所化学部技術オペレーター

1986年は化学部で働いていました。当時33歳でした。3号炉と4号炉の管理をしていました。爆発した4号炉から20mの距離で仕事をしました。事故が起こったときは、チェルノブイリ原発で仕事をしていました。

○パデノク元チェルノブイリ原子力発電所職員（元原子炉稼働部上級技師）

私は今、65歳です。その当時は40歳でした。1号炉と2号炉の職員で、事故の前日、チェルノブイリ原発で燃料として使った廃棄物を原発から出す仕事に関わっていました。事故後は、夫も私も処理員として仕事をさせられました。87年、チェルノブイリ事故から1年後に私は健康の理由で仕事を終え、キエフで政府の放射線の調査委員会の職員となりました。今は退職しています。以上です。

○笠議員

稲葉さんは、キエフに長く住んでいるのですか。

○稲葉ひろ子慈善基金「ゼムリャキ」日本語及び英語ボランティア教師

私はロンドンに住んでいます。

1985年の2月にロンドンに親と学校を探しに行き、1986年チェルノブイリの事故の直前にロンドンに行き、そのまま住んでいます。そのころからチェルノブイリのことに大変興味がありまして、私でできることはしたいと思っていたのですが、なかなか機会がありませんでした。

5年前にウクライナに来たときに、レニングラードの友人からダビンチさんを紹介していただき、彼にチェルノブイリのゼムリャキに連れてきていただきました。私がロンドンで出来ることは何かと聞きましたら、お金が一番いいと言われました。一応ロンドンからお金を送りますということでお送りして、ゼムリャキに来ましたら皆さんがこのように迎えてください、ゼムリャキには日本語を学びたい人が大勢いるということを聞きました。

その当時は、やはり住むということができませんでしたので、6カ月に1回、毎回1カ月間の集中コースということで、日本語を教えてまいりました。

私は、昔から、原発は恐ろしいので何とかなくしたいと思っておりまして。まさか日本で原発の事故が起きるとは夢にも思いませんでした。

今回、特にキエフでお会いした今中先生や、いろいろな方々の情報をロンドンで私の友人にインターネットを通じて皆さんに渡しました。すべて日本のお友達にも全員、どれほど恐ろしいかということを知らせました。

今回の福島のことを教訓にしてドイツとイタリアが脱原発を決めましたが、日本も何とか一日も早く原発をなくして欲しいです。核廃絶と反原発の流れを世界中につくっていくことが、広島、長崎、福島で被害を受けた方々のためにも、日本人の使命ではないかと思っています。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店上級販売員

世界で、今すぐに原発をなくすことができないと私は思っています。非常に難しい問題です。原子力発電より安い方法は今のところありません。風力などいろいろ

な方法がありますが、今のところ原発をなくすことができません。

私は日本の国民全員に感謝したいと思っています。

日本では福島原発の事故、それに台風も来たり、いろいろな問題があることをテレビで見ましたが、ひどい事故が起こり、ひどい状態でも、日本からウクライナに講師が来たり、いろいろ日本の文化を教えていただけることが非常にありがたいことで感謝しています。ありがとうございます。

○笠議員

今、お話がありました。昨日から色々な方々と、政府、議会の関係者の方と意見交換をした中で、2点お伺いをしたい。まず、1986年に事故が起こっても25年経つわけですが、いまだに50%のエネルギーを、これだけの事故を経験しながら原発に依存している。それに対して、率直にウクライナの皆さんがどういう思いを持っておられるのか、が一点。

次に、事故を起こしても2000年まではチェルノブイリで原発が稼動していたというのは、ちょっと今、我々が福島で、例えば今回事故を起こしていない原発を稼動させることができるのかということ、それはとてもじゃないけれどもできない状況だと思うのですが、国民の感情的にも、また政治家としても。その辺は率直にどういう受けとめをされているのか、2点についてお伺いさせていただきます。

○パデノク元チェルノブイリ原子力発電所職員（元原子炉稼動部上級技師）

私が答えます。その当時はソ連でしたが、ソ連時代はいろいろな情報を隠していたのです。その事故は26日に起き、29日にゴルバチョフさんがテレビに出ている話しましたが、3日も経っていたということです。

デンマークまで放射能が来て、デンマークの科学者がそれを測定してわかって全世界に広げましたが、それがなかったら多分、ソ連の国民も知らなかったかもしれないです。

その当時、私はチェルノブイリ原発の職員であり、事故が起きたことはすぐにわかりましたが、ピリピャチ市の市民は何わかっていませんでした。私の息子も、26日に学校に行こうとしましたが、学校にも情報はありませんでした。情報のない中で、処理作業がすぐに始まりました。軍隊、チェルノブイリ原発の警備員、その職員の力で処理作業がすぐに始まりました。

チェルノブイリ原発を復興することが不可能であることは90年に分かりましたが、その前は復興させようと全国から、全ソビエト連邦からキルギスタン、カザフスタン、いろいろな国からいろいろな処理の人が来ました。

私たちは、原発の職員として原発のために何かしたい、役に立ちたいという意思がありました。全国から来た人たちもその意思がありました。

事故については、チェルノブイリ原発の安全システムの問題、国のマネジメント、ウクライナの共産党のマネジメント等いろいろな間違いがあったと私は思っています。

キエフの地下鉄やモスクワの地下鉄の職員、ドネツク工業地帯の炭鉱で働いている人たちは、まさにボランティアとして、処理するために原発に来て頑張っていました。多分、彼らボランティアに処理を任せるということ自体も間違いであったと

私は思っています。

もう1つ、2000年まで14年間、事故後もチェルノブイリ原発は稼働していましたが、なぜ国民がそれに反対しなかったかは、ちょうどその時期はソ連邦が崩壊した時期であり、国民にとって非常に難しい時期でした。仕事が無くなり、家族がどう生活していくかに不安があり、全世界、日本、アメリカ、ドイツなどいろいろな国から支援を受けたことは感謝していますが、原発に反対するどころか、自分の生活を先に考えていたのです。

○太田議員

今現在、原発に反対する意見は、国民の多数意見なのでしょうか。それともエネルギー源としての原発は、必要であるとの意見が多数でしょうか。脱原発との意見は国内で全体の何%ぐらいとか、世論の動向を教えてくださいませんか。

○パデノク元チェルノブイリ原子力発電所職員（元原子炉稼働部上級技師）

国民は、原発だけではなく、ほかの問題、自分の家族の問題とか個人的な問題がたくさん重なって、反対する余裕がないというのが正しいと思います。

86年に事故が起きて、その後はグリーン運動、緑の運動があり、そのときは彼らの声が強かったですが、2、3年後には余り聞えなくなりました。

○笠議員

緑の運動は、いつごろ起こったのですか。

○パデノク元チェルノブイリ原子力発電所職員（元原子炉稼働部上級技師）

事故直後です。グリーン党の職員はウクライナにある原発職員でした。

○稲葉ひろ子慈善基金「ゼムリヤキ」日本語及び英語ボランティア教師

私が感じるのは、ここに9回ぐらい来ておりますけれども、やはりその日その日の生活が本当に大変であることです。私は、ロンドンに帰りましたら天国のように感じました。それぐらいここでの生活というのは大変で、皆さんは反原発とか廃炉とか、そういうところまで考えられないのです。物価もロンドンでは世界で一番高いと言われていますが、ほとんどロンドンと同じぐらいの値段です。それで収入は、その方にもよりますが、本当に少ない収入で、どうやって生活しているのか。もう私自身も考えられないぐらい気の毒に思っています。

だから本当に日本がやはり反原発の流れをつくっていければ、世界中に少しずつそれが伝播していくと思います。

ウクライナ国民が反原発の流れをつくっていくことは、本当に生活に余裕があり、原発に対する知識をもっと持った人が出てくれば変わってくると思いますが、やはりこれは日本でなければできない、これからの日本の使命だと思います。

○照屋議員

グラボフスキーさんにお伺いします。

チェルノブイリ原発事故当時はどんな仕事に就いていたのか。その頃、原発が事故

を起こすことを考えていましたか。また、事故後は、どう思っていらっしゃるのでしょうか。

○グラボフスキー元チェルノブイリ原子力発電所化学部技術オペレーター

原発は、その国だけが持つものではなくて、全世界のものだと私は思っています。なぜかという、もしそういう同じような事故が起きたら、その国だけではなくて、他の国にも影響が非常にあるからです。

事故当時のことを少し詳しくお話しますと、私の勤務シフトが始まり、その夜は実験を行うとの情報がありました。インジケーターには何も問題なく、全部の機械も順調に稼働していました。その当時、2人のオペレーターがいて、私はオペレーターの一人として、ヘッドの人とメインオペレーター3人が、インジケーターを見たり、いろいろコントロールしていました。その近くには、シフトのトップの人、化学部部长もいました。それ以外にも、4号炉の炉長、副炉長も、皆その当時は原発にいました。何か事故が起こる様子もなく、全部順調に進んでいました。

突然、爆発が起きましたが、それほど大きく感じられませんでした。なぜなら、壁の厚さは1メートルぐらいあり、それほど大きく損傷しなかったのです。空気が流れ出すシステムがあり、そこから埃が出てきました。爆発が起きてそれを感じたときに、インジケーターに集中しました。インジケーターを見て、3号炉は順調で、4号炉のインジケーターは水のレベルが急に下がったことがわかりました。深刻な事故が起こった気はしませんでした、数字を見て驚きました。

隣には、機械の中の水に加熱した蒸気を入れたシリンダーがあり、時々揺れる場合もあったので、今回も揺れたときは、最初にそれが変なのではないかと思いました。私は自分のいる部屋を出て、そのシリンダーをチェックしに行きましたが、チェックした時には何も異常がありませんでした。自分のいる部屋は9階にあって、6階にあるその機械をチェックし、3階にあるフィルターなどもチェックしに行きました。その検査後、4号炉に向かう通路があり、その通路を歩いて4号炉に行く道が二つあるが、その一つの道はもう崩壊していました。その一つの道の方にはポンプがありました。私はエレベーターで降りようとしたのですが、エレベーターがありませんでした。なぜなら、エレベーターが下に落ちていました。エレベーターのドアの形が変わったことから、爆発が起きたことがわかりました。エレベーターは使用できなかったため、他の道を選び、奥の通路を歩いて行きました。4号炉の機械まで来たら、もう屋根に穴があいており、コンクリート等いろいろな金属と一緒に混ざったゴミがいっぱいありました。消防士もそのときに来ていて驚いていました。

私と一緒にいた（後にアメリカに移住した）ハムルス氏や他のオペレーターはもう少し先に行きたかったようですが、私は行かない方がいいと言いました。爆発したとがわかっていましたし、自分は働いている部屋を出て来たときに、大きな事故が起こったと思わずに出てきたので、体を守る防護マスクも何も持っていませんでした。

その後の、様子を見て、自分の働いている部屋と上司の事務所まで行ってどうすればいいかと聞いたところ、上司が1人30分交代で仕事を続けると言いました。他の人は1号炉、2号炉に行くことに決定したものの、爆発のせいかわからないが

電話も使えず、大きな問題でした。また、放射線量を測る機械が壊れて、何も表示がされませんでした。

そのとき外に出て様子を見ると、救急車がたくさん来て、被害を受けた人、どのぐらいの被害かわからないが、そのまま救急車で運ばれた様子を見ました。

4号炉を見ましたが、3号炉と4号炉は建物が一緒になっており、3号炉で4号炉の方が見えていませんでした。壊れている機械と、燃えている物質が周りにたくさんありました。

私と一緒にいたハムルス氏は1号炉へ行き、私は自分の30分のシフトが始まるころでしたので、インジケーターに戻ってきましたら、壁には液体が流れていました。それに埃がたくさんあったので、インジケーターの表示も見えず、何も稼動していなくて壊れていました。

その後、シャワーを浴び服も着がえました。いつも放射線量を測る小さま機械を持っていましたが、それが全部壊れていました。その後、気分が悪くなって、吐き気がしてきました。

朝になると、薬が配られ始め、ピリピヤチ市内でも、学校でも、いろいろところでヨードとカリウムの薬が皆に配られ、私もその薬をもらいました。

その後、バスに乗ってピリピヤチ市に向かうも、起きたことについて何も話すなと厳しく言われていましたので、家に着くと、隣人に「何が起きたのか」と聞かれましたが、「何も無いが、4号炉はない」とだけ話しました。

○笠議員

確認したいのですが、スホルコヴァさんも上司に何も話してはいけないと言われたのですか。

○スホルコヴァ元ピリピヤチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

原発の全職員が中でのことを外の人に話さないとの書類にサインしたので、何も話すことはしませんでした。

○グラボフスキー元チェルノブイリ原子力発電所化学部技術オペレーター

被害にあった原発の職員や調理人は、グループに分かれてモスクワの病院に行かされました。

○スホルコヴァ元ピリピヤチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

そこは、原発に関係している企業や工場を管轄している特別の病院でした。原発に関係ある職員は、何か問題があればすぐにモスクワの病院に行かされました。その病院の各階の部屋にも、「何も話してはいけない」とのメモがありました。

病院で私は警察官から質問を受けましたが、警察官は原発事故について私よりもよく知っているようでした。

○笠議員

警察官ではなく、特別な人かもしれませんね。

○パデノク元チェルノブイリ原子力発電所職員（元原子炉稼働部上級技師）

はい、ただの警察官ではなく、KGBだったかもしれません。大学を出て、原発について本当に詳しくわかっている人でした。

○グラボフスキー元チェルノブイリ原子力発電所化学部技術オペレーター

この機会に話しておきたいのですが、ウズベキスタンのタシケントという町の話で、そのタシケントの人は1954年、チェルノブイリ事故の32年前に、多くの人がウラン鉱山で働いており、ウラン物質が肺にあり肺が非常に汚れていたため、被害者だと認識され、ずっと病院を行ったり来たりしていました。

86年に私がその病院に行ったときに、その人と話をしました。その当時、その人は放射線被害者との扱いでしたが、事故後は、なるべく情報をソ連政府が隠そうとの理由からか、その人までも、放射線被害者じゃなくて、ただの被害者という認識に変えられたようでした。

その人の被曝量は200マイクロレントゲンでした。足のつまめから出ている放射能の量は非常に高く、体の中はどうだかわかりません。体内はもっとあったかもしれません。それは彼が被害を受けてから32年経った時期であり、32年前であったら、もっとあったかもしれません。

病院に行っていたときは、1ヶ月ほど、毎日体を洗っていましたが、それはシャンプーではなく特別な洗剤で洗っていました。

私が病院を出るときの放射量は800マイクロレントゲンでした。最初は事故が起きた時に着ていた服だと思いましたが、その服はすぐに脱いでモスクワに行ったので服の問題ではなかったと思います。裸の状態ですら再測定したところ、そのまま800マイクロレントゲンでした。多分、それは肺からではないかと思えます。86年末にキエフでまた測定したときは360マイクロレントゲンでした。それは外部の被曝です。内部はもっと大きかったかもしれません。保護マスクをしていなかったのも、たくさん放射能を受けたのではないかと思います。

○太田議員

その間に、病気は何かされましたか。

○グラボフスキー元チェルノブイリ原子力発電所化学部技術オペレーター

やはり血管、心臓の問題です。今までいろいろあります。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

私は原発の専門家ではありませんが、一人の市民として話をします。私はキエフの東にあるハリコフという町に避難しました。そのときには、どの病院に行っても検査ができると言われました。私は放射線研究所に電話をしました。研究所には何か問題が起きているとの情報はありませんでした。「情報は何もありませんが、どうぞ来てください。検査します。」と言われました。

放射線研究所職員は、みんな保護マスク、防護服を着ていて、すごく怖かったですし、扱いも嫌な扱いでした。なぜなら、この人たちは特別な人、さわらない方がいいという思いがあったのかもしれません。子供と男性はすぐに髪を切られました。

また、体を洗うときの洗剤は特別のものを使いました。

○田名部議員

原発事故後の事態の深刻さは、どのぐらい認識されていたのか。どのような影響があるとか、どのような受けとめ方をされていたのか。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

ラジオ放送を聞きながら避難したときは、すごく怖かった。最初は3日間だけ避難するという情報であり、一時的に避難するとの情報でしたので、あまり自分の荷物を持っていきませんでした。飼っていた2匹の犬と一緒に連れていった人や、スポーツウェアを着て避難した人もいました。

○田名部議員

それは爆発に対する恐怖なのか、放射能に対する知識や認識は市民の方々は深くないと思いますが、大変なことが起きたとの意識はあったのですか。

○パデノク元チェルノブイリ原子力発電所職員（元原子炉稼働部上級技師）

普通の市民だけでなく原発の職員にも何も情報はなく、服もそのまま道に集められました。

○笠議員

確認ですが、何日に原発の事故が起きたことがわかったのか。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

26日の夜、チェルノブイリ原発に事故が起きたことがわかりました。

○笠議員

27日に避難したのは、ラジオなどで避難しろという指示があったのか。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

ラジオ放送を聴いて怖くなり、皆、バスに乗って出発しました。

○パデノク元チェルノブイリ原子力発電所職員（元原子炉稼働部上級技師）

26日の朝、学校に行き、1限目の授業時に事故の情報を知りました。そしてヨードカリウムの薬を貰い、その夜に息子は授業が終わって帰宅し、私の分の薬も持ってきました。

私が住んでいたマンションの人たちは、原発職員だけでしたので、そこの男性職員は皆原発に呼ばれていきましたが、私たち女性は皆で集まって、マンションを掃除しました。

26日に原発職員の友人や元同級生が入院していることがわかりました。また、27日に夫がモスクワに行かされるともわかったので、翌朝の10時に、奥さん達みんなで集まり病院に見送りに行きました。病院までバスが来て、バスに乗る人た

ちは外で待っていました。バスを待つ間、港の隣にあった砂の保管場所へヘリコプターが飛んで来て砂を取り、原発の方へ運ぶのが何度も見えました。時々、ヘリコプターから我々が立っている頭上に水がこぼれ落ちてきましたが、おそらく、4号炉から出たスチームがヘリコプターに付き、頭上に落ちてきたのではないかと思います。見送りから家に帰るときに原発職員と会い、避難するから準備するように言われました。それは27日の12時のことです。実際に避難することになり、大きな事故が起こったということを実感いたしました。

27日の13時にラジオ放送があり、そのラジオ放送の中では「14時に避難してください。3日間だけの一時的な避難です。必要なものだけ、書類、IDなど、必要な服だけを持って行ってください。また、電気製品を全部消して出てください。水、ガス、全部止めてください。もし冷蔵庫に食品が入っていたら持って行ってください」というものでした。

避難準備は26日に始まり、キエフ市のいろいろな交通の機関が動き始めて、27日の朝、1200台のバスがもうピリピャチ市の少し手前で待っていました。

ピリピャチ市民はその当時5万人住んでいましたが、全員、14時から17時までに避難しました。

○太田議員

スホルコヴァさんの子供さんへの政府補償は、どのようになされていますか。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

最初、家族一人当たり50ルーブルの補償金をもらいました。

○笠議員

当時の50ルーブルは、どのくらいの価値ですか。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

当時のレートは、1ドル≒約1.2ルーブルでした。

○笠議員

それは一時金ですか。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

一時金です。その後、200ルーブルまで上がりました。

○田名部議員

当時、1カ月の給料はどのくらいでしたか。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

給料は、1カ月200ルーブルでした。

○パデノク元チェルノブイリ原子力発電所職員（元原子炉稼働部上級技師）

原発近くでは、320ルーブル、500ルーブルまでもらいました。

○笠議員

当初、避難は3日間と言われたけれども、その後も皆さんはそのまま避難生活が続くわけですが、その後、仕事はどうしたのか。また、どのように政府は支援したのですか。

○スホルコヴァ元プリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

一時的に50ルーブル。その後は200ルーブルが支払われ、その後は、仕事を探してもらったり、自分で探したりしました。

○笠議員

では、金銭的にはそれ以降は全然もらっていないわけですか。

○スホルコヴァ元プリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

最初は、5,000ルーブルを貸しますとの話でしたが、いろいろな反対の声が上がり、そのお金はそのまま補償金の形としてもらいました。

○吉井議員

年金のように継続的に出るものはないのですか。

○グラボフスキー元チェルノブイリ原子力発電所化学部技術オペレーター

ありません。

○スホルコヴァ元プリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員

まず、被害を受けた人たちは皆アパートを貰いました。さらに一時的にクレジットという形で、家族1人では4,000ルーブル、さらに1人増えるごとに1,500ルーブル。つまり3人家族は7,000ルーブルとなります。

○グラボフスキー元チェルノブイリ原子力発電所化学部技術オペレーター

私の家族はクリミア半島に避難し、そこの病院で検査をしました。病院は検査する人で行列ができましたが、住んでいた場所により順番が替わりました。チェルノブイリ原発から4kmしか離れていない、我々が住んでいたプリピャチ市よりも、18km離れたチェルノブイリ市の人たちが先に検査を受けたり、薬をもらったりしていました。事故情報が、国民にあまり知らされていなかったのです。

○笠議員

先ほど、スホルコヴァさんには6歳のお子様がおられたとのことでしたが、例えば、御自身の子供がその後何か病気になったとのことはないのか。あるいは、お友達の同じような小さいお子さんの中で事故の影響は、今、出ているものなのか。それに対する補償はどうなっているのか。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員
子供の目は悪くなりました。

○吉井議員
甲状腺はどうですか。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員
甲状腺より血液の問題でした。

子供が6歳のときに事故が起き、子供にいろいろな病気が出てきた場合、子供の病気が放射能に関係しているとの証明書を作成し、被害を受けた人たちは全部、特に子供、0歳から15歳までの子供は証明書をもらっていましたが、それでも証明書だけで、補償はありませんでした。15歳を超えたら子供ではないとのことで、大人としていろいろな検査を受けました。

○太田議員
放射線の影響で自分の子供が病気になったら、政府を恨みますか。

○スホルコヴァ元ピリピャチ市内児童用品店「子供の世界」上級販売員
恨みませんが、原発という怖いものの近くに住んでいることは既にわかっていますし、元に戻せないのです仕方がありません。

○笠議員
今日、大変貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。皆様方は実際に体験をされ、本当に困難な生活を強いられてこられた、そういった思いを、我々もまた、日本人であります、同じように受けとめながら、しっかりと今後の対応策に取り組んでいきたいと思えます。
今日は本当にありがとうございました。

【写真】クラシツカ「ゼムリヤキ」代表らと議員団

